

## CIEC第75回研究会報告

テーマ 「なぜ協調自律学習は必要か」

-変動社会における生涯学習の実現を目指して-

日 時 2008年6月22日(日) 13:00 - 17:00

会 場 京都女子高等学校

講 師 「なぜ協調自律学習は必要か」

-変動社会における生涯学習の実現を目指して-

西之園 晴夫 氏(NPO法人学習開発研究所代表)

ワークショップ

「チーム学習」を実践する

齊尾 恭子 氏(大阪国際大和田高等学校)

望月 紫帆 氏(NPO法人学習開発研究所)

司 会 大橋 真也(千葉県東葛飾高等学校)

参加者 25名

小中高部会の主催する研究会は、本年度、2008PCカンファレンスのテーマ「創発する学び」と関連させて実施していくことになった。このたびは、3月実施した第73回研究会のテーマ「教える授業から、学ばせる授業へ」に続き、「創発する学び」をより具体的な授業実践につなげたいと考えている。そこで、多様化する学習者に対応し他の人と協力しながら学ぶことを実践・指導してこられた西之園晴夫先生(NPO法人学習開発研究所代表)をお招きし「協調自律学習」について講演していただき、その後、参加者によるワークショップとしてチーム学習の体験とあわせて、この研究会がお互い学びあいながら「創発」にむかう場になることを目指した。

まず前半の部として、西之園晴夫先生(NPO法人学習開発研究所代表)より、「なぜ協調自律学習は必要か」変動社会における生涯学習の実現を目指してという演題で講演していただいた。

先生の講演ではおもに欧州の教育モデルを参考にしながら、授業研究を始める前に、授業について3つのタイプがあり、(1) 授業についての理論は講釈できるが、自分の授業の設計も評価もできない=評論家タイプ(2) 授業の実施は格段に上手だがそれを記述したり説明したりできない=職人的熟練者タイプ(3) 授業を計画的合理的に改善できる方法論をもち、自分の授業の組み立て方を説明できるだけでなく、新しい授業を開発できる=専門的熟練者タイプがある。そこで、これから実現したい授業は、まず低所得者に無償の高等教育を提唱できる枠組みを作り多人数の授業でありながら一人一人の受講者が能力を最大限発揮でき、学習を通じて協調でしてお互いの能力を最大限伸ばせる授業、つまり価値の多義性と能力の多様性によって自律して学習できる個性的な授業の展開が大切であり、このことは今まで行われてきた理論専攻型の授業ではなく、他で実施されていない新しい授業の開発研究を行うことが、これからの高等教育を展開するうえでは大事であると言われていた。現在、特に高等教育が当面している問題として、まず高等教育における発達段階の問題があげられる。理想的な発達段階として、エリート教育からマス教育そしてユニバーサル教育へ系統化されていくが、残念ながらユニバーサル化への展望が欠落したことがあげられる。このことは知識基盤社会が求めている知識労働の質が低下し、同時に格差の問題にも繋がっている。近年は格差社会の問題があげられ、格差をもたらす負の効果、例えば犯罪、失業、社会不安の上昇や社会

福祉費の高騰などがあげられ、教育でも国公立大学や私立大学の授業料・入学金が年々上昇しており、ひとりに対する負担額も世界主要国の中でも一番高いとされている。

これらを打破するためには、低所得者層への無償による高等教育の提供であり、社会的経済的出身階層に関係なくひとりひとりの国民が能力を最大限に発揮できる高等教育が求められる。また、学びを通じて協調してお互いの能力を最大限に伸ばせるような教育によって協調と競争のバランスを保つことになる。

(残念ながら日本では難しい問題もあるが)

そこで、インターネットを利用した遠隔授業による大学の開設である。例えば、スウェーデンの Netuniversity ではスウェーデン国内の全体学生数340,000人に対しネット大学の全学生数は70,000人と全体の20%を占めているのである。教員数も15~20名程度である。教材も大学で共同開発され、オンラインで提供する仕組みをしている。授業の内容も日本での教養教育ではなく職業教育に力点を置いているのも特徴のひとつである。また、デンマークでは貧困家庭でのインターネットアクセスできる割合も全体の70%となっている。

こうしたことから、欧州では従来の大学からインターネットを利用した遠隔授業による大学がクローズアップされている。

次に授業過程を考えた場合、従来のPDS (Plan-Do-See) では上手くいかない。そこで統合と分析に区分される。前者はメタファー (例えば・・・) からイメージされたものを解釈して、モデル化され改善された授業となる。一方、後者は質的量的分析を行う分析概念を経て、モデル化される。

前者のメタファーの事例として、学習の変容、チーム学習の診断、遠隔授業、そして大学教員同士での共同研究などがあげられる。授業展開のイメージは、あるテーマに基づいて協力しながら情報収集を行い、チーム内で討議をした結果を発表し、報告書にまとめる。チームで協力しながら共有できるテーマについての問題解決を図りながら、個人の「学ぶ力」を培う学習であり、教えることを極力抑えることが可能になる。これが協調自律学習のモデルである。これらの授業を設計する場合、MACETOモデルがあり、学習事象によって、M(意味)A(活動)C(内容)E(環境)T(道具)O(成果)のサイクルを生む。つまり仮説として学習者の内的条件を整えることによって、外的条件が十分でない場合でもその困難を克服して協調自律学習を実現できることになる。しかしこの場合でも課題設定のおいても自由化にするとうまくいくチームとそうでないとの差が大きくなること、バラバラのテーマでは発表の時に討議できないまたは深まらないといった失敗例もある。したがってテーマ設定をする場合は、誰もがよく知っているか、誰も知らないテーマにすることが望ましく、また誰かが特定テーマに精通しているものがいれば、その人が中心となり、他の人はフォロアーになることができる。さらにこれらを行う場合には前提条件をそろえると参加しやすくなる。

例えば、「情報の用語集を作成」することをイメージして頂きたい。メタファーを用いた場合、作業を始めるにあたってスタッフの自己紹介から始めると思うが、方法として「アイスブレイキング」を用いて名前を覚えながら作業の分担を行い、各分担したチームがそれぞれの情報収集を行いながら、まとめとして各チームの情報を統合し、最後に用語集が完成する。また完成した用語集について試用と用語のテストを経てから完成となる。つまり、この考えを推進するために「タコ壺的授業研究」を進めることになる。現在、日本を取り巻く諸外国を見渡しても、自分の授業の問題は解決できず、さらに日本の大学の授業料は世界一高額なため教育生産性が低いことを考えると、まだ誰も実現していない授業を開発することである。これこそが協調自律学習が必要となる要因であることを最後にまとめていただいた。

後半の部では、ワークショップとして参加者全員が実際にチーム学習を経験することになった。現在、高等学校の現場で実際にチーム学習の授業が行われている、大阪国際大和田高等学校の齋尾恭子先生を講

師に、ワークショップをおこなった。始めに、チーム学習について理解するために、高校の授業で行われている実践例から、中・高等学校で取り組みやすい内容を想定してチーム学習の枠組みについて紹介された。

チーム学習の枠組みとして、(1) コミュニケーションタイプ・インベントリーに基づくチーム編成 (2) 全員が参加する役割分担の明確化 (3) 進行はチームごとに生徒が行うことになる。

特に (3) についてはチームごとにメンバーが知恵を出し合い課題に取り組むことになる。

なお、コミュニケーションスタイルインベントリーの著作源は株式会社コーチAに所属している。今回のワークショップでは、コミュニケーションスタイルインベントリーテストの簡易版の掲載許可を得ている学習ガイドブック『教育の技術と方法』（西之園晴夫編著）を用いている。

このチーム学習を行うねらいとしては、基本的な学習スキル（コミュニケーションスキル）の習得である。つまり、学びの喜びを体感することによって自己の肯定感が広がることである。なお、ここでの学習スキルとは、(1) 問題をみつけるスキル (2) 聴く読むスキル (3) 調べる整理するスキル (4) 吟味検討するスキル (5) まとめる書くスキル (6) 覚えるスキル (7) 表現するスキルと分類されるがこれらをまとめると「考えて発表するスキル」の習得である。

その後、授業の流れ（教師の解説、チーム学習、教師のまとめ）を説明し、参加者はあらかじめ提示されていたコミュニケーションインベントリーテスト簡易版（コミュニケーションタイプの自己チェック）の結果で各チーム（1チーム5名程度）に分かれてチーム学習をおこなった。

チーム編成後、自己紹介をした後それぞれの役割分担を決め、あらかじめ渡された「指令票」にしたがって進められた。

内容はテーマ（教員1年目の思い出など）について、次の6要素を入れて筋立てて説明することがねらいである。はじめに「いつ（時間）」「どこで（場所）」「だれが（人物）」「なにを（対象）」「なぜ（理由）」「どのように（行為）」の6要素にテーマに基づくキーワードを列挙していき、さらにそれらのキーワードをひとつに抜き出しながら、最後には文章（作文）を作成する論理力の基礎を深める問題であった。

参加者は、それぞれグループで与えられた時間内でそれぞれのテーマにあうキーワードを書き、それを文章化してチーム内で発表していた。それぞれのチームでは役割分担が明確化されており、全員がチームに参加する取り組みとなっていた。

約1時間チームで取り組んだ後に全体発表として各チームの取組内容の発表があった。実際にチーム学習を経験しての感想も述べられ、それに対して、質問や助言もあった。

今回、「創発する学び」のテーマで研究会を行ったが、生徒や学生の学びを引き出す方法として西之園先生の「協調自律学習」やワークショップで実践された齋尾先生の「チーム学習」の展開について、今後の授業を行ううえで大きなヒントとアイデアを提供されたと思う。今回の参加者は小中高校での先生方が多かったが、この研究会で得たものを学校現場に持ち帰って実践してみたいひとりとなった。

ありがとうございました。

（文責 石谷 正）